

## 『アエネーイス』におけるユートウルナの役割と機能<sup>1</sup>

三田祐子・高橋宏幸

### はじめに

トゥルヌスの妹ユートウルナはユピテルに純潔を奪われたことから、その見返りに永遠の生を与えられたニンフ(12.139-41)である。彼女はそうした存在として神的な力を用い、女神ユーノーの促し(12.142-53, 156-59)に従って、トゥルヌスに迫る死という運命の実現を遅らそうと一度ならず画策する。トゥルヌスとアエネーアースが一騎打ちに向けて誓約を交わす祭儀の場では、姿を変えてルトゥリー人らを唆すとともに、彼らの前に予兆を示すことで(12.222-56)、神聖な儀式をイタリア方とトロイア方と双方入り乱れて戦う修羅場に変えた。また、この混乱の中で深手を負って一時戦場を離れたアエネーアースが母神ウェヌスの神薬により復帰すると、御者となってトゥルヌスの戦車をアエネーアースから遠ざけた(12.468-85)。さらに、トゥルヌスがみずから望んで始まった一騎打ちのさ中にも、トゥルヌスを手助けした。すなわち、彼が誤って携えてきた自分のものではない剣を折ったとき、彼自身の剣を届けた(12.784-85)。しかし、ユピテルがユーノーとの取引での合意を受け、戦いに決着をつけるべく、復讐女神を送り込むに及んで、ユートウルナは、もはやトゥルヌス延命の手だてでは残されていないと観念し、悲痛な嘆きの言葉を吐いたのち、川の深みへ身を沈めて退場する(12.869-86)。

このように描かれるユートウルナについて、かつてはあまり注目されることがなかった。そうした状況を変えたのは Barchiesi によるユートウルナの嘆きに関する論考<sup>2</sup>である。Barchiesi は、ユートウルナが退場する際の嘆きが悲劇やジャンルとしての哀悼など英雄叙事詩とは異質な文学伝統の常套から構成され、叙事詩の文脈から孤立する形で表現されていること、この孤立性によって、作品の主題である「ローマ建国」として実現する運命、運命を司るユピテルへの憤激を含む内容も本筋をはずれた挿入として、結局、叙事詩の常套である「遅滞」(retardation)として機能していることを論じた。Barchiesi は広い目配りのもとに精緻な議論を展開し、刺激を受けた派生的論考もいくつか生まれた<sup>3</sup>一方、文学常套を重視する見方には批判も受けた。Hardie は、Barchiesi

<sup>1</sup> 本稿は三田が『アエネーイス』第12巻について」と題し、2013年度卒業論文として京都大学文学部に提出した論考に三田の了解のもと高橋が手を加えたものである。三田が学業を離れたため、高橋が三田の論旨を生かしながら、参考文献を加え、全体に補正（主要追加論点はユートウルナとアエネーアースの比較）を施した。

<sup>2</sup> Barchiesi (1978)。

<sup>3</sup> Barchiesi がユートウルナの嘆きと第4歌のディードーに関わる語りに共通する語彙、表現を指摘したことを受けて、Castellani と West はユートルナとアンナの比較を試みた。いずれも作品の主要

が「孤立性」を強調するあまり、ユートウルナが人間界と天界をつなぐ機能を果たしている点を見逃している、とした<sup>4</sup>。また、ウェルギリウスが詩作した同時代と関わる意義に目を向けなかった点は **Perkell** によって批判された。**Perkell** は、**Barchiesi** がトポスに由来すると解したものが現実の政治的文脈に置き直しても理解可能であり、少なくとも同時代の読者はそのように読み取りえた、としたうえで、哀悼が叙事詩の構成要素の一つであると同時に戦意を凋ませる力を有すること、その力の矛先がとくにユピテルに向けられることは支配体制の陰で苦しみを受けた犠牲者に同情を示す強いメッセージを含む、と解した。

このような議論からも窺えるように、ユートウルナに関する解釈は『アエネーイス』という作品の理解に深く関わっており、その解釈に彼女の悲嘆が重要な意味をもつことは間違いない。しかし、そのためにかえて、これまでは彼女の悲嘆にばかり目を奪われてきた感を否めない。実際、ユートウルナが登場する第 12 歌全体を見渡したとき、彼女には他の登場人物にはない特色のあることが気づかれる。それは、ユピテルから永遠の命を与えられた半神という立場ともあいまって、第 12 歌の主要登場人物のすべて、つまり、トゥルススやルトゥリー人、アエネーアースやトロイア人という人間たちだけでなく、ユピテルやユーノーという神々、さらには、トゥルススに引導を渡した復讐女神ディーラとも交渉をもったことである。このように多様な関係性を有する登場人物は作品全体を探しても見当たらない。このことは **Barchiesi** が指摘したユートウルナの悲嘆の「孤立性」と奇妙な不整合を感じさせる。それは **Hardie** が言うような、単にユートウルナが人間と神の中間的存在であることに留まらない意義を予想させる。また、そうした関係性に照らしたとき、ユピテルに対する悲憤もユピテルのみに関わるものなのか検討する余地があるようにも思われる。

本稿はこのような観点から『アエネーイス』におけるユートウルナの役割と機能について、彼女のユピテル、ユーノー、トゥルスス、アエネーアースとの関わり方を検討することを通じて考察する。

## 1. ユピテルとユートウルナ

ユートウルナのユピテルとの関係は第 12 歌での彼女の最初の登場から明瞭に示さ

---

登場人物を手助けすることで運命の実現を遅らせる点が共通することに着目した。しかし、有益な指摘の一方で、**Castellani** も結論において認めるように、両者のあいだには違いのほうが多い。その点で比較は必ずしも成功しているようには見えない。他方、**Oblink** は **Barchiesi** が指摘した **Philodemus, de Pietate** からの影響をさらに詳しく論じた。

<sup>4</sup> **Hardie**, 149, n.42.

<sup>5</sup> 作品中の最初の言及は 10.439 で、トゥルススに若者ラウススを助けに行くよう促して、パッラースとの一騎打ちに向かわせる。ただ、「恵み深い妹」(*alma soror*)とあるだけで名前も示されない。この個所について **Harrison**, 185 は詩人が後から付け加えた可能性を示唆している。

れる。

アエネーアースとトゥルヌスの一騎打ちを前にトロイア、イタリア両軍がそれぞれ見守る場所を占めた(12.123-33)とき、これを天上から見たユーノーがユートウルナにトゥルヌスを手助けするよう促す。

extemplo Turni sic est adfata sororem  
diua deam, stagnis quae fluminibusque sonoris  
praesidet (hunc illi rex aetheris altus honorem  
Iuppiter erepta pro uirginitate sacrauit):  
'nympha, decus fluuiorum, animo gratissima nostro,  
scis ut te cunctis unam, quaecumque Latinae  
magnanimi Ioui ingratum ascendere cubile,  
praetulerim ...' (12.138-45)

女神はすぐさまトゥルヌスの妹にこう語りかける。

——この妹も女神にして、湖沼とせせらぎ聞こえる川を  
治める。この誉れは天高く座す王が授けたもの。

ユピテルが彼女の純潔を奪った償いに贈ったのだった——。

「ニンフよ、川の誉れよ、わが心にこのうえない喜びである者よ、  
おまえも知ってのとおり、剛毅なユピテルの恩知らずな床に上がった  
ラティウムのニンフというニンフの誰にもまして、おまえ一人を  
私は慈しんだ。・・・」

地の文とユーノーの言葉の二度にわたってユートウルナがユピテルに純潔を奪われた<sup>6</sup>ことが強調される。乙女にとってなによりも耐え難いと想像される苦痛の代償として、神々と人間の王は彼女に不死性を与えた。女神として湖や川を治める力を得ることは「誉れ」(honorem 140, decus fluuiorum 142)<sup>7</sup>とされる。ところが、「恩知らずな床」

---

<sup>6</sup> オウィディウス『祭暦』2.585-616 にはユピテルがユートウルナを追うエピソードが語られる。穏やかならざる恋情に屈した神が追いかけると、ニンフは森や水に隠れて逃げる。ユピテルは他のニンフに協力を要請するが、姉妹のニンフ、ララがユピテルに反してユートウルナに警告を与える。激怒したユピテルはララを罰して冥界へと送る。オウィディウスの叙述が『アエネーイス』の叙述を踏まえることについては、cf. Murgatroyd (2003). Murgatroyd, esp. 311, は、『アエネーイス』12.448-9 でのユートウルナが戦線に復帰したアエネーアースから逃げるのに対し、『祭暦』2.595 では、愛欲に燃えた神から逃げる点で、ユピテルとアエネーアースが重ね合わされていることを指摘する。

<sup>7</sup> 同じく『祭暦』1.464 にはユートウルナが祭られた神殿、1.708 には「ユートウルナの泉」への言及がある。これら神殿と泉については Servius にウァッローにもとづくと思われる証言がある。泉

(*ingratum cubile* 144)という詩句に暗示されるように<sup>8</sup>、この「誉れ」はユートウルナにさらに耐え難い苦痛をもたらす。トゥルヌスを助ける手だてが尽きた深い嘆きの中でユートウルナは次のように言う。

'... haec pro uirginitate reponit?  
quo uitam dedit aeternam? cur mortis adempta est  
condicio? possem tantos finire dolores  
nunc certe, et misero fratri comes ire per umbras!  
immortalis ego? aut quicquam mihi dulce meorum  
te sine, frater, erit? o quae satis ima dehiscat  
terra mihi, manisque deam demittat ad imos?' (12.878-84)

「・・・これが純潔を捧げた見返りなのか。  
何のために永遠の命を下さったのか、なぜ奪い取ったのか、死の  
掟を。さもなくば、これほどの心痛を終わらせることもできように。  
せめていま、哀れな兄のため冥途の道連れとなれように。  
不死なのか、私は。いや、私の生に楽しいことなどあるうか、  
兄よ、あなたがいなければ。どこに底の底まで口を開いてくれる  
大地があるのか。女神の身では冥界の底へ突き落としてくれぬのか」。

なまじ不死性を与えられたがために、ユートウルナは永遠にトゥルヌスの死を悲しみ続けなければならない。こうして純潔を奪ったうえに終わりのない苦痛を強いるユピテルはユートウルナにとって身勝手に不条理な暴君のような存在である。

その一方、ユピテルが与えた不死性によってユートウルナが、悲憤という形ではあるにしても、トゥルヌスの記憶を保ち続けることはトゥルヌスにとって誉れとなるとも考えられる。というのも、高橋(2013)に観察されたように、『アエネーイス』には、死者への誉れとしての「永遠の記憶」というモチーフが繰り返し現われる<sup>9</sup>からである。ミーセーヌス(6.232-35)、パリヌールス(6.377.81)、カイエータ(6.900-01, 7.1-7)の場合は命を落とした土地にそれぞれの名前が残され、ニーススとエウリュアルス(9.446-49)の場合は詩人の歌が後世に伝える、とされる。とくに、カイエータの場合、彼女が死と

---

は Numicius 川の近くにあつて、ローマのすべての祭儀の水がここから運ばれたとされる一方、神殿はルターティウス・カトゥルスによってマルス広場に建立され、創建にちなむ祝日は *Iuturnalia* と呼ばれたという(Serv. ad A.12.139)。Scullard (1981), 64 はこの祝祭を、『祭暦』1.464 の言及から1月11日に比定している。

<sup>8</sup> Cf. Tarrant, 127.

<sup>9</sup> 高橋(2013), 6-8.

ともに得た名声の永遠性(aeternam moriens famam, Caieta, 7.2)は彼女の誉れ(honors tuus 7.3)とされ、ユートウルナの不死性(immortalis 12.882)が誉れ(honorem 12.140)と言われることと詩句のうえでも共通する面がある。また、ニーススとエウリュアルスの場合には、彼らに関する記憶が続くのは、「アエネーアースの家がカピトリウムの揺るぎなき巖に構えられているかぎり」(dum domus Aeneae Capitoli immobile saxum accolit 9.448f.)とされ、カピトリウムのユピテルが永遠性の保証を与えるように言われる点は、ユートウルナに不死を授けたのもユピテルであることと重なる。

ここから、トゥルヌスについての永遠の記憶を含意することに詩人の意図があった可能性が推測される。ただ、ここで問題は、ユートウルナ一人だけがトゥルヌスを思い続けても、それは誉れとはならないということである。誉れは誰からも称えられることで誉れとなる。ミーセヌス、パリス、カイエータの場合には、それぞれの名前を冠した土地を知る人のすべてが、ニーススとエウリュアルスの場合には詩人の語りに触れるすべての人が敬意を共有している。ユートウルナの悲嘆の場合はどうか<sup>10</sup>。

この点で興味深いのは、最後にユートルナが去るとき、

caput glauco contextit amictu  
 Multa gemens et se fluuio dea condidit alto. (12.885-86)  
 頭を青黒い 蔽いに包むや、  
 しきりに嘆息を吐きながら、女神は川の深みに身を沈めた。

と描写されることである。頭を蔽う所作(caput contegere)は死者への服喪もしくは自殺の意志を示しうることが指摘されている<sup>11</sup>。服喪が暗示されているとすれば、すでにユートウルナはトゥルヌスの命が尽きたかのように悲嘆に沈んでいることになる。この点で、彼女の嘆息(multa gemens 886)は、トゥルヌスがアエネーアースの槍によって腿の真ん中を射抜かれて倒れ伏したときにルトゥリー人が吐いた嘆息(gemitu 12.928)、さらに、トゥルヌスが命を奪われたときの呻き(gemitu 12.952)<sup>12</sup>とも響き合っているように思われる。その一方、自殺の意志が含意されているとすれば、それはユートウルナが——不死の身で命を絶つことはできないのであるから——この世との関わりを一切

<sup>10</sup> 注 7 に示したように、ユートウルナという泉が現実存在し、祝祭まで行なわれたことは確かである。また、ユートウルナ(Iuturna)という名前の中にはトゥルヌス(Turnus)の名前の響きが含まれる。さらに、セルウィウス(ad A.12.139)は、彼女をトゥルヌスの妹としたのは詩人の創作であると証言している。これらのことは、ミーセヌスらと同様、トゥルヌスについても、ユートウルナを通じて永遠の記憶が意図されていることを示唆する。しかし、『アエネーイス』の中では、泉は特定されず、信仰への言及もない以上、慎重な扱いをする必要がある。

<sup>11</sup> Cf. Barchiesi, 121, n.31, Tarrant, 317.

<sup>12</sup> Cf. Hardie, 150.

絶とうとしていることを意味することになろう。この場合、彼女の悲嘆は彼女一人のうちに抱え込まれるだけであろうと推測される。

加えて、そもそも『アエネーイス』はアエネーアースがトゥルヌスに止めを刺す場面で終わるためにトゥルヌスへの葬礼を描くことがない。しかし、高橋は、モデルとする『イーリアス』との関連も含めた結末場面の描かれ方、作品全体にわたる「葬礼」のモチーフの展開に照らして、トゥルヌスに葬礼の施されるか否かが作品に重要な意味をもつことを論じた<sup>13</sup>。この議論に妥当性があるとすれば、ユートウルナの悲嘆もここに関わって相応の意義を有すると考えられる。

いずれにしても、トゥルヌスに葬礼が施されるかどうか明瞭に示されないことに呼応するように、ユートウルナの永遠に続く悲嘆もトゥルヌスに替れとなるかどうか曖昧である。

## 2. ユーノーとユートウルナ

ユートウルナ(Iuturna)という名前は「助ける」(iuuare)という語に由来するとされ<sup>14</sup>、その名のとおりに、彼女はトゥルヌスを手助けし続ける。手助けがもはや叶わなくなったことを悟ったとき、彼女は「いま、トゥルヌスよ、あなたに妹がどんな手助けができるのか」(quid nunc te tua, Turne, potest germana iuuare? 12.872)という言葉で悲嘆を語り始め、それが終わるとともに退場する。彼女の存在はトゥルヌスを助けるためののみあるかのようなのである。

このようなユートウルナにトゥルヌスへの手助けを促したユーノー(Iuno)の名にもまた「助ける」(iuuare)という語が関連づけられる。ユートウルナの登場がほぼ第 12 歌にかぎられるのに対して、ユーノーは第 7 歌に語られる戦争の始まりからトゥルヌスを手助けし、彼がアエネーアースに殺されないように画策する。しかし、ユーノーがトゥルヌスを助けようとする動機はユートウルナとは全く異なる。

ユーノーが復讐女神アッレクターをラティーンヌス王の後アマータやトゥルヌスのもとへ、さらに、イウルスの狩場へも差し向けて戦争の火種を撒かせた(7.323-539)のは、そこから起きる戦いでトゥルヌスを勝たせるためではなかった。ラティーンヌス王が神託に従って、いままさに到着した異国の王アエネーアースに娘ラーウィーニアを嫁がせ、盟約を結ぼうとしたとき、ユーノーは次のように言う。

ast ego, magna Iouis coniunx, nil linquere inausum  
quae potui infelix, quae memet in omnia uerti,

<sup>13</sup> 高橋(2013), esp. 14-16, id.(2014), esp. 114-16.

<sup>14</sup> Serv. ad A.12.139 'Iuturna..., cui nomen a iuvando est inditum.' Cf. Tarrant, 126.

uincor ab Aenea. quod si mea numina non sunt  
 magna satis, dubitem haud equidem implorare quod usquam est:  
 flectere si nequeo superos, Acheronta mouebo.  
 non dabitur regnis, esto, prohibere Latinis,  
 atque immota manet fatis Lauinia coniunx:  
 at trahere atque moras tantis licet addere rebus,  
 at licet amborum populos excindere regum.  
 hac gener atque socer coeant mercede suorum: (7.308-17)

ところが、私はユピテルの後であるのに、できることは一つ残らず  
 みな試みた。あらゆることに奔走した。それでも、哀れなことに、  
 勝つのはアエネーアースだ。だが、わが神威の偉大さが  
 足りないなら、私は嘆願するのをためらわぬ。どこの神格でもよい。  
 天上の神々の心を靡かせることができなければ、アケロンを動かそう。  
 ラティウムの王国から閉め出すことはかなうまい。それはそれでよい。  
 ラーウィーニアが妻となることも運命により動かしえぬ定めだ。  
 だが、事態を引き延ばし、この大事業に遅滞を加えることはできる。  
 両王の国民を根絶やしにすることはできる。  
 婿と舅が連合するには、それだけの代償を臣下に負わせることとしよう。

アエネーアースがラーウィーニアを妻に迎えることは運命の定めとして動かないこと  
 をユーノーは知っている。つまり、トゥルヌスがルトゥリー軍を率いてトロイア軍に戦  
 いを仕掛けても勝利を得られないことを女神は見越している。そのことは、トゥルヌス  
 を戦争へ駆り立てたアッレクトーの言葉の中で「報われずとも、この危難に立ち向かえ」  
 (*ingratis offer te periculis* 7.425)という詩句に暗示されている。この表現はユートウルナ  
 がユピテルに強いられた「恩知らずな床」(*ingratum cubile* 144)という句を想起させ  
 る<sup>15</sup>。神との同衾の報いがユートウルナに永遠の悲嘆を与えるだけであつたのに対応す  
 るように、女神の助力は、結局、トゥルヌスを死地に導くだけである<sup>16</sup>。それでも、女  
 神がトゥルヌスを助ける<sup>17</sup>のは、彼にできるだけ長く戦争を続けさせ、運命の実現を遅

<sup>15</sup> *ingratus* は作品後半に 3 例見られるが、残り 1 例もトゥルヌスについて用いられている。これについては後述。

<sup>16</sup> トウルヌスが戦争に対して自発的であつたかどうかについては議論がある。Pöschl, 122 によると、トゥルヌスは本来は気高い英雄らしさを備えていながら *furor impius* の化身とされてしまったのであつて、彼自身に罪はなく、アッレクトーの力によって狂わされて行動している。大芝, 53-55 はこれに反論して、トゥルヌスの行動は彼自身の自発的意思によるものであると主張している。ここでは Pöschl の論を採用する。

<sup>17</sup> 具体的な個所としては、戦争勃発後、トゥルヌスのもとにイーリスを送り、アエネーアースが陣

らせることにより、そのあいだにトロイア人のみならず、ルトゥリー人にも多大な犠牲を払わせることを目的としているからである。

このような、トゥルススへの助力＝彼の延命→運命の実現に対する「遅延」(moras 7.315)<sup>18</sup>＝戦争の継続→両軍の犠牲の増大、というユーノーの目論見はユピテルによっても是認されている。パッラスがトゥルススに討ち取られたあと、アエネーアースがルトゥリー人を次々に倒しながらトゥルススに迫ると、ユーノーはユピテルに対してトゥルススの助命を嘆願する(10.615-616)。これにユピテルは次のように答えた。

'si mora praesentis leti tempusque caduco  
oratur iuueni meque hoc ita ponere sentis,  
tolle fuga Turnum atque instantibus eripe fati:  
hactenus indulsisse uacat. sin altior istis  
sub precibus uenia ulla latet totumque moueri  
mutariae putas bellum, spes pascis inanis.' (10.622-27)

「そなたの願いが目前の破滅を遅らせ、若者の死まで時を稼ぐことにあり、それがまさしく私の定めるところと思うなら、トゥルススを逃がしてやれ。迫り来る運命から救い出せ。ここまでなら大目に見る余地がある。だが、そなたがこれ以上を望んで祈願の陰に願いの主旨を隠し、戦争全体の動揺や変化を思い描いているなら、それは抱いても空しい希望だ。」

ユピテルは、戦争の結末がアエネーアースの勝利となることは決まっており、それが覆えることを望むのは空しい(spes inanis 10.627)としながら、この場ではまだトゥルススに迫る死に対して時間稼ぎ(mora praesentis leti tempusque 10.622)を行なうことを容認する。これを聞いてユーノーは、トゥルススが助からない運命に不満を口にしながらも(10.628-32)、雲からアエネーアースに似せた幻像を作り、これでトゥルススを戦場から誘い出すことによって二人の対決を回避させることに成功する(10.636-65)。

こうして、最終的にアエネーアースが勝利を収めることが運命の定めである一方で、それが実現するまでには多大な犠牲をとまなう「遅延」があることも運命であり、この

---

営を留守にしたことを知らせ、機会に乗じるよう鼓舞する(9.2-13)。トゥルススに向かって投げられた槍を傷を負わせる軌道から逸らす(9.745-746)。敵へ槍を投げつけるトゥルススに勢いと気力を授ける(9.764)。トロイア方に押し戻されるトゥルススを助けようとするが、ユピテルの命によりとどめられる(9.802-803)。神々の会議の場で、ウェヌスに対抗してルトゥリー軍に助力するのは非道ではない(nos aliquid Rutulos contra iuuisse nefandum est? 10.84)と主張する

<sup>18</sup> このモチーフについて、高橋(2003)、とくに97-98, 104-105 参照。



「遅延」のためにユーノーはトゥルヌスを助けて彼の延命を図る。トゥルヌスが生きて戦うかぎり、女神の目論見どおり、戦争は終わらず、犠牲が増え続けるからである。

以上のように、ユーノーがトゥルヌスを助けるのは、彼に哀れみを感じるからではなく、自分の目的達成のために彼を最大限に利用するためである。そのように女神がトゥルヌスを「駒」として扱う態度は、第 12 歌に入って自身の直接介入を控え、ユートゥルナにトゥルヌスを助けるよう指示する場面にも現われる。

ユーノーはユートゥルナに以下のように語りかける。

'qua uisa est Fortuna pati Parcaeque sinebant  
cedere res Latio, Turnum et tua moenia texi;  
nunc iuuenem imparibus uideo concurrere fatis,  
Parcarumque dies et uis inimica propinquat.  
non pugnam aspicere hanc oculis, non foedera possum.  
tu pro germano si quid praesentius audes,  
perge; decet. forsan miseros meliora sequentur.'

(12.147-53)

「幸運の女神も許すと思われたかぎり、運命の女神らも認めた  
ラティウムの盛運が尽きるまで、私はトゥルヌスとおまへの城市を庇った。  
今、若者は私の目の前で抗いような運命と相対している。  
運命の女神の定めた日と敵の一撃が近づいている。  
この戦いも、この取り決めも目を開けて見ることが私にはできぬ。  
だが、おまへは兄のため、もっと間近でしてやれることがあるなら、  
ためらうな。それが当然だ。哀れな者にも、よりよき日がいつか来よう」。

いまやアエネアースとトゥルヌスの一騎打ちが取り決められ、誓約のために祭儀が行なわれようとしているいま、もはやユーノーにはトゥルヌスへの助力が許されないため、ユートゥルナを自分の新たな駒として使おうとする。一騎打ちもそのための祭儀も見ていられない(12.151)という言葉は女神の強い感情を示しているが、それはトゥルヌスへの哀れみではなく、自分の目論見がまだ十分に果たされていない悔しさの現われと考えるべきであろう。実際、トゥルヌスの死に近いことを聞くやただちにユートゥルナが涙を溢れさせ、胸を打って(*lacrimas oculis Iuturna profudit/ terque quaterque manu pectus percussit honestum* 12.154-55)、悲しみを顕わにするのに対し、女神はこれを「いまは涙を流すときではない」(*non lacrimis hoc tempus* 12.156)とたしなめる。Tarrant も指摘するように、女神にとってユートゥルナの悲しみは意味をなさないかのようで

る<sup>19</sup>。女神には、ユートウルナも自分の策略を実現するための道具としてしか考えられていない。

それに対して、ユートウルナはトゥルヌスの命をなにより大切に思い、彼のために恐怖を抱く。ユーノーは指示を終えると、ユートウルナを「心を決めかね、胸が悲しい痛みで乱れたまま残していった」(*reliquit/ incertam et tristi turbatam uulnere mentis* 12.159f.)と語られる。ここまでユートウルナは一言も発していない。あまりに大きな悲しみの前に言葉も出ず、すぐにはどのようにすればいいかも分からず、心の痛みに耐えることしかできないかのようである。それでも、一騎打ちの誓約のために祭壇の前に進み出たトゥルヌスが下を向き、青ざめているのを見ると、彼を思う気持ちを行動に移し、ルトゥリー人らを、言葉と予兆によって鼓舞する (12.222-56)。これによって引き起こされた戦いの中で負傷したアエネーアースが再び戦場に立ったとき、その恐怖をラティウム軍の誰よりも先に感じたのはユートウルナであった(*prima ante omnis Iuturna Latinos/ audiit agnoui que sonum et tremefacta refugit* 12.448-49)。この恐怖に気が動転し(*Hoc concussa metu mentem* 12.468)、彼女は御者メティスクスに姿を変えてトゥルヌスを乗せた戦車をアエネーアースから遠い場所に走らせる(12.468-485)。その姿は

nigra uelut magnas domini cum diuitis aedes  
peruolat et pennis alta lustrat hirundo  
pabula parua legens nidisque loquacibus escas,  
et nunc porticibus uacuis, nunc umida circum  
stagna sonat.<sup>20</sup> (12.473-77)

それはあたかも、裕福な主人の広大な屋敷を黒い  
ツバメが飛び回るときのよう。翼に乗って棟高い広間を通って、  
かまびすしい雛の食べる小さな餌を集めつつ、  
いまは、がらんどうの柱廊、また、いまは水豊かな  
池のまわりでさえざる。

というように、雛鳥のために必死で飛び回る母鳥の姿に喩えられる。比喻のポイントが大切な命を護ろうとする思い、そのために抱く心配にあることは疑いない<sup>20</sup>。しかし、やがてアエネーアースがラティヌス王の城市を攻め、后アマータが自害したとの知らせを受けて、トゥルヌスがみずから一騎打ちを決意し、ユートウルナを置き去りにしたとき、彼女は嘆き悲しんだ(*maestamque sororem/ deserit* 12.682f.)。それでも、一騎打

<sup>19</sup> Tarrant, 130.

<sup>20</sup> Cf. Tarrant, 213f.

ちのあいだもトゥルヌスに果敢に剣を届ける手助けをし(12.784-85), 深い悲嘆を残して去るのは、ユピテルが彼女を目当てに復讐女神ディーラを送り、もはや「遅延」の策動の余地がまったくないことが明瞭に示されてからである(harum (sc. Dirarum) unam celerem demisit ab aethere summo/ Iuppiter inque omen Iuturna occurrere iussit: 12.853-54). そして、トゥルヌスを失った彼女の心の痛みは永遠に消えることがない(quo uitam dedit aeternam? .../ ... possem tantos finire dolores/ nunc certe 12.879-81)

ユーノーはそこまで自分の駒を助けることに固執もしなければ、損失の痛みも感じる様子がない。雲間より戦いを見つめているユーノーにユピテルが語りかけ、「いまや、どのように終結させるのだ、后よ。最後に残るのは何だ。・・・いまはもう、やめるがよい。折れてくれ。私が頼む。それほどに心を痛めるな。黙ったまま身を苛むな。・・・これ以上の企ては私が禁ずる」(quae iam finis erit, coniunx? quid denique restat?/ .../ desine iam tandem precibusque inflectere nostris,/ ne te tantus edit tacitam dolor .../ ulterius temptare ueto. 12.793, 800-01, 806)と、「遅延」の終結を勧告すると、これにユーノーは「心ならずもトゥルヌスと大地をあとにした」(Turnum et terras inuita reliqui 809)と答えた。不満はあっても、ユピテルに言われる前からすでにトゥルヌスを見捨てていた、というのである。そして、戦場を去る見返りに、ラティウムの民の名前と言葉が存続し、その中にトロイア人が埋没するという条件をユピテルに認めさせると、了解して頷き、心の痛みが消えたかのように喜ぶ(adnuit his Iuno et mentem laetata retorsit 12.841)。ユートゥルナの悲嘆に終わりが無いのとは対照的に、ユーノーのトロイア人に対する憤激には区切りがつけられ<sup>21</sup>、それと同時にトゥルヌスのことも、また、ユートゥルナのことも関心の外に消えてしまうかのようである。

### 3. トウルヌスとユートゥルナ

上に見たように、動機や目的はまったく異なるものの、ユーノーとユートゥルナはともにトゥルヌスを助けて彼を生きながらえさせようとする。しかし、そうした延命工作がなされることをトゥルヌス自身は必ずしも望んでいない。高橋は「非情」(saeuitia)のモチーフの検討において、作品後半、「戦争」の文脈では、「非情な」(saeuus)は「命を奪うまで仮借ない」という意味で多く用いられること、その点で戦場で随一の武勇を誇り、向かうところ敵のいないアエネアースがもっとも非情であると見られること、彼の非情は誰よりもまずトゥルヌスを倒すことに向けられていること、しかし、その一方で、トゥルヌス自身はアエネアースに命を奪われることよりもむしろ、仲間が討ち

<sup>21</sup> これは、もちろん、ここで女神の怒りが終わるということではない。序歌に示されたように、それは少なくともポエニー戦争まで消えない。その点で、Tarrant, 305 が考えるように、女神が去るときに付される interea(12.842)は「とりあえず、それまでのあいだ」という含意であるかもしれない。

取られてゆく中で生き残ること、そのことから、仲間を犠牲にしても自分だけ生き残ればよいと考えているとの非難を受けること、つまり、恥辱にまみれた延命のほうに彼にとって非情なことであることを観察した<sup>22</sup>。

この点で、トゥルヌスは伝統的な英雄像を継承していると言える。アキッレウスが、戦えば短命だが大きな榮譽を得る一方、戦いを避ければ榮譽はなくとも長く生きられる、という自分の運命を承知のうえ(Hom. *II* 9.410-16)で、トロイアに戦うことを選んだように、また、ヘクトールがブリアモスとヘカベーからアキッレウスと戦うのをやめよと懇願されても、仲間からの非難を恐れ、手柄を立てるか命を落とすか一騎打ちに賭ける覚悟を決めた(ibid. 22.24-130)ように、英雄は名誉のために命を惜しまず、臆病者、卑怯者という汚名を嫌って戦場に立つ。トゥルヌスもアエネーアースとの一騎打ちを望んで次のように宣言する。

'nulla mora in Turno; nihil est quod dicta retractent  
ignauī Aenēdae, nec quae pepigere recusant:  
congregior: fer sacra, pater, et concipe foedus.  
aut hac Dardanium dextra sub Tartara mittam  
desertorem Asiae (sedeant spectentque Latini),  
et solus ferro crimen commune refellam,  
aut habeat uictos, cedat Lauīnia coniunx.'

(12.11-17)

「トゥルヌスに逡巡はない。約束の言葉を引っ込めさせるには及ばぬ。  
臆病なアエネーアースの子らに取り決めたことを翻させてはならぬ。  
私が相手をする。父王よ、祭儀を執り行ない、協約を策定するがよい。  
この右手がダルダニア人をタルタラの底へ送り込んでやるか  
——アジアの逃亡兵の末期をラティウムの民は座って見物していればよい。  
私一人が剣で我々すべてにかかった嫌疑を晴らしてやる——  
さもなくば、敗れて、ラーウィーニアをあゝの男の妻に譲るか、だ」。

これに対して、ラティーンヌス王が思い留まるよう懇願する(12.18-45)と、トゥルヌスは返答(12.48-53)の中で「死の代償に榮譽を得る代償を結ばせてくれ」(letumque sinas pro laude pacisci 12.49)と求め、さらに、后アマータの哀願(12.56-80)には、「トゥルヌスには死を先延ばしにする自由はない」(neque enim Turno mora libera mortis 12.74)と応えた。

トゥルヌスは、一騎打ちに身命を賭すことに逡巡はなく(nulla mora 12.11)、先延ばし

---

<sup>22</sup> 高橋(2003), esp., 95-98.

の余地はない(neque mora libera 12.74), と言う。上に見たように、ユーノーとユートウルナによるトゥルヌスへの助力は運命の実現に対する「遅延」(mora)として表現されていた。ユーノーはこの目論見のためにトゥルヌスを利用している。しかし、トゥルヌス自身は女神の思惑どおりに動くことは(思惑を知っているか否かは別として)望んでいないことが認められる。

さて、ユーノーはトゥルヌスを自分の目的に有用な駒として見ているから、彼の心情を顧慮しないとしても不思議はない。けれども、ユートウルナはトゥルヌスを大切に思っているから、彼の胸のうちを慮り、望みを遂げさせたい、と考えたとしても不自然ではないと考えられる。この点で興味深いのは、ユートウルナが策略を講じる際に、自分の命より名誉を重んじる英雄の価値観をよく心得ていることが窺えることである。

一騎打ちの誓約のために祭壇の前に進み出たトゥルヌスが下を向き、青ざめていたことから、見守るルトゥリー人たちのあいだに動揺が生じるのを見て取ったユートウルナは高貴な家の生まれのカメルスに姿を変えて、ルトゥリー人たちを鼓舞する。

'non pudet, o Rutuli, pro cunctis talibus unam  
obiectare animam? numerone an uiribus aequi  
non sumus? ...  
ille quidem ad superos, quorum se deuouet aris,  
succedet fama uiuusque per ora feretur;  
nos patria amissa dominis parere superbis  
cogemur, qui nunc lenti consedimus aruis.' (12.229-31, 234-37)

「恥と思わぬか、ルトゥリー人よ、これほどの勇士ぞろいがただ一人の  
命を危険にさらすとは。数でも、力でも、かなわぬというのか、  
我々が・・・  
あの勇士は祭壇に一身を捧げている。必ずや、神々のもとへも  
達する誉れを得るであろう。人々に語り継がれて生き続けよう。  
だが、我々は祖国を失い、横暴な君主に従うことを  
強いられるだろう。それなのにいま、じつと野に座り込んでいるのだ」。

ユートウルナは恥の意識と名誉心に訴えてルトゥリー人を叱咤する。全員が力を合わせて戦えば勝てるはずなのに、トゥルヌス一人を危険にさらして手をこまねいている彼らは勇士の名折れである。このままでは恥辱にまみれて生きることになる。一人でも勇士らしく命を賭して戦うトゥルヌスが不朽の榮譽を得ようとしていることに倣い、いまこそ立ち上がれ、と訴える。この言葉を聞いて、伝統的英雄の価値観を共有する者なら、心が動かぬはずがなく、ユートウルナにそれがよく分かっていたことは疑いない。実際、

ルトゥリー人のみならず、ラウレンデース人やラティウムの人々まで、それまでは戦いの終わりを望んでいたのに、一騎打ちの取り決めを無効にして戦争を欲するように気持ちを变化させた(12.240-43)。続いてユートウルナが鷲と白鳥の予兆を空に示すと(12.244-55)、彼らはトルムニウスを先頭に神聖な祭儀の場を血みどろの戦場に一変させた。

また、負傷が癒えて戦場に復帰したアエネーアースがユートウルナ操るトゥルヌスの戦車の追跡からラティースの城市攻撃へ矛先を転じたあと、后アマータの自害に起因する大きな悲嘆がトゥルヌスの耳にも届いて、彼が手綱を引いて立ち止まったとき、ユートウルナは御者になりすましたままこう言った。

'Hac, Turne, sequamur  
Troiukenas, qua prima uiam uictoria pandit;  
sunt alii qui tecta manu defendere possint.  
ingruit Aeneas Italis et proelia miscet,  
et nos saeua manu mittamus funera Teucris.  
nec numero inferior pgnae neque honore recedes.'

(12.625-30)

「トゥルヌスよ、こちらから追いかけてよう、  
トロイアの子らを。そこに最初の勝利への道が開けている。  
他の者の手でも王宮の防衛はできよう。  
アエネーアースはイタリア人に襲い掛かり、戦いに巻き込んでいます。  
我々もテウクリア人らに仮借のない死を送りつけよう。  
倒した数でも、戦いの荣誉でも、あなたが引けをとることはなかろう」。

戦局の切迫をトゥルヌスも認識している状況で、この言葉はユートウルナが意図した効果を上げなかったものの、説得のために戦士の荣誉に訴えていることは見て取れる。

このように、ユートウルナは伝統的英雄の価値観をよく心得ており、また、トゥルヌスがそうした英雄像を体現する勇士でありたいと願っていることもよく知っている。しかし、トゥルヌスが願いどおりに命を賭して戦うことをユートウルナは望まない。命よりも荣誉を重んじる価値観を共有していないのである。そのことは彼女の悲嘆に暗示されているように思われる。

'quid nunc te tua, Turne, potest germana iuuare?  
aut quid iam durae superat mihi? qua tibi lucem  
arte morer? talin possum me opponere monstro?  
iam iam linquo acies. ne me terrete timentem,

obscenae uolucres: alarum uerbera nosco  
 letalemque sonum, nec fallunt iussa superba  
 magnanimi Iouis. haec pro uirginitate reponit?  
 quo uitam dedit aeternam? cur mortis adempta est  
 condicio? possem tantos finire dolores  
 nunc certe, et misero fratri comes ire per umbras!  
 immortalis ego? aut quicquam mihi dulce meorum  
 te sine, frater, erit? o quae satis ima dehiscat  
 terra mihi, manisque deam demittat ad imos? (12.872-84)

「いま、トゥルヌスよ、あなたに妹はどんな手助けができるのか。  
 いまや、私に残された道があるのか。あなたの命を引き延ばす  
 どんな術策があるのか。あのような怪物に私が対抗できるのか。  
 もう、すぐに私は戦列を去る。脅さずともよい。私は怖いのだ、  
 不潔な汚らわしき鳥よ。私には分かる、その翼の羽ばたき、  
 死の響きが。天上からの命令にも気づいている。  
 ユピテルの寛き御心によるのだ。これが純潔を捧げた見返りなのか。  
 何のために永遠の命を下さったのか。なぜ奪い取ったのか、死の  
 掟を。さもなくば、これほどの心痛を終わらせることもできるように。  
 せめていま、哀れな兄のため冥途の道連れとなれように。  
 不死なのか、私は。私の生に楽しいことなどあろうか、  
 兄上よ、あなたがいなければ。どこに底の底まで口を開けてくれる  
 大地があるのか。女神の身では冥界の底へ突き落としてくれぬのか。」

Perkell が指摘するように<sup>23</sup>, 故人を惜しむ哀悼においては、遺徳を偲ぶのが普通である  
 のに、ここにはそれが見られない。『アエネーイス』の中でも、パッラースの場合には、  
 遺骸を前にアエネーアースとエウンアンドロスがそれぞれ、彼が立派な勇士であったこ  
 とを語っている(11.55-58, 169-75)。ところが、ユートゥルナはトゥルヌスについて、延  
 命策が尽きたこと(12.872-74)、一緒に死にたいこと(881)、彼のいない生に喜びがないこ  
 と(882)を述べて、勇ましさを武勲など、彼の英雄としての資質にまったく触れることが  
 ない。彼の死が英雄として誉れを得るものであったとしても、そのことが彼女にとって  
 少しも慰めとはならないかのようなのである。彼女がトゥルヌスをなにもに代え難く大切に  
 思うとき、それは、トゥルヌスがどれほど英雄としての生をまっとうしたいと願ってい  
 るか知っていようと、栄光に浴したトゥルヌスではなく、肉親として生をとともにでき

<sup>23</sup> Perkell, 276.

るトゥルヌスである。

このことは、ユートウルナの永遠に続く悲嘆がトゥルヌスの誉れとなるかという上に提起した問題にユートウルナの立場からの答えを与えるもののように思われる。上に見たように、不死は神々の王がユートウルナに与えた誉れ(hunc illi rex aetheris altus honorem/ Iuppiter 12.140-41)であった。その誉れをいま、彼女は、ユピテルが何のために永遠の命を自分に与えたか、と嘆き、これを捨て去りたいと願っている(12.879-81)。トゥルヌスを失っては、神々に列せられる自身の誉れすら彼女にとって無意味である。トゥルヌスが生きていないなら、もはや彼がどのような誉れを得ようと、ユートウルナにとってまったく関心がないものと想像される。

ただ、ユートウルナが誉れに価値を認めないことは、ユートウルナの存在を通じてトゥルヌスの誉れが示されることと矛盾しない。第1歌、ディーダーが建設中であったユーノー神殿の扉絵にトロイア戦争の事跡が描かれているのを見たとき、アエネーアースについて、

lacrimans 'quis iam locus,' inquit, 'Achate,  
quae regio in terris nostri non plena laboris ?  
en Priamus. sunt hic etiam sua praemia laudi,  
sunt lacrimae rerum et mentem mortalia tangent.  
solue metus; ferret haec aliquam tibi fama salutem.'  
sic ait atque animum pictura pascit inani  
multa gemens, largoque umectat flumine uultum. (1.459-65)

彼は涙を流して言った。「アカーテースよ、いまやどの場所が、  
地上のどの国が、我々の苦難で満たされていないだろうか。  
見よ、プリアムスを。ここにも誉れは報酬を受けている。  
ここにも人の世に注ぐ涙があり、人間の苦しみは人の心を打つ。  
恐れを捨てよ。この名声がおまえにもたらす救いは必ずある」。  
こう言うと、実のない絵で心を慰めつつ、  
しきりに嘆息を吐き、溢れる涙で顔を濡らす。

と語られる。このとき、英雄が嵐によって仲間のうちに犠牲を出しながら、自分も命ながらもがきながらも分からぬ土地に漂着し、トロイアでの戦友が命を落とす場面を涙とともに見つめる立場は、トゥルヌスと死別するユートウルナと通じる面がある。この点で、**multa gemens** はユートウルナについても用いられる詩句である(12.886)。そのうえで、ユーノー神殿の扉絵が示す同情はトロイア人への誉れとなり、生き残ったアエネーアースらを苦難の底から救い出すというように語られている。ここには、当事者が与り知ら



ないところでも、誉れを称える人々があることが示されている。ユートウルナとトゥルヌスの場合にも同様のことが想定されうる。

#### 4. アエネーアースとユートウルナ

さて、大切なトゥルヌスの命を奪うよう運命が定めたアエネーアースはユートウルナにとってなによりも恐ろしい敵である。実際、受けた傷の治療を終えて再び戦場に現れたアエネーアースを見て真っ先に逃げ出したのは彼女であったと語られる。

uidit ab aduerso uenientis aggere Turnus,  
uidere Ausonii, gelidusque per ima cucurrit  
ossa tremor; prima ante omnis Iuturna Latinos  
audii agnouitque sonum et tremefacta refugit. (12.446-49)

向かってくる軍勢をトゥルヌスは正面の土塁から見た。  
アウソニア兵らも見つ。と、凍るような戦慄が骨の  
髄を走り抜けた。ラティウム兵の誰よりもユートウルナが  
その音を聞いて、事態を悟り、驚愕して逃げ去った。

そして、トゥルヌスの戦車をアエネーアースから遠ざける。

solum densa in caligine Turnum  
uestigat lustrans, solum in certamina pocit.  
Hoc cuncussa metu mentem Iuturna uirago  
aurigam Turni media inter lora Metiscum  
excutit et longe lapsum temone reliquit;  
ipsa subit manibusque undantis flectit habenas,  
...  
fertur equis rapidoque uolans obit omnia curru,  
iamque hic germanum iamque hic ostentat ouantem  
nec conferre manum patitur; uolat auia longe. (12.466-71, 478-80)

(アエネーアースは) 濃い暗がりの中で、トゥルヌスただ一人を  
探してあとを追ひ、彼一人を戦いの場へ求める。

このことを恐れて気の動転した乙女ユートウルナは  
トゥルヌスの御者メティスキスを両の手綱のあいだへ  
振り落とし、轅から転落したのを遠くうしろへ置き去りにする。  
その代わりに自分が波打つ手綱を両手で操り、・・・

馬を操る。戦場のいたるところに戦車を飛ばすように走らせ、  
ここと思えば、またあちらでと兄の勝ち誇る姿を示すが、  
組み合って戦うことは許さず、遠く離れて飛びまわる。

このようにアエネーアースはユートゥルナにとって恐ろしい敵である一方で、すでにユーノー神殿の扉絵の場面に1例を見たように、彼女との共通点も認めることができる。第一は、ユートゥルナが戦いに敗れて命を落とすトゥルヌスのことを悲しむように、アエネーアースもトロイアで、また、イタリアで戦死した仲間を悼み、涙を流すことである。関連して、ユートゥルナが不死を得たように、アエネーアースも、ユピテルの言葉に示されるように、インディゲースとして神格化される運命にある(12.794-95)。ユートゥルナの悲嘆が永遠に続くとするれば、戦争の犠牲者へのアエネーアースの哀悼も終わりを見ることがないと考えられる。第二には、ユートゥルナが命よりも名誉を重んじる伝統的英雄の価値観を支持しないように、アエネーアースはトロイアにおいて故国陥落とともに英雄としての生をまっとうしなかった。それが運命の定めではあっても、彼はおめおめと生き延びたのである。これら二点をより詳しく次に見てみよう。

第2歌、ディードーに乞われてトロイア陥落を語るとき、アエネーアースは次のように口を切る。

Infandum, regina, iubes renouare dolorem,  
Troianas ut opes et lamentabile regnum  
eruerint Danaï, quaeque ipse miserrima uidi  
et quorum pars magna fui. quis talia fando  
Myrmidonum Dolopumue aut duri miles Vlixī  
temperet a lacrimis? (2.3-8)

「女王よ、言葉にし難い悲しみを新たにせよ、とあなたは命じている。  
いかにしてトロイアの富と痛ましい王国を  
ダナイ一人が覆したか、この目で見た悲慘きわまりない出来事、  
この身が少なからぬ役割を果たした出来事を語れ、と。これを聞いて誰が、  
ミュルミドネス人であれ、ドロペス人であれ、非情なウリクセースの兵士であれ、  
涙を抑えることができませんか」。

そのように悲しみに満ちた出来事の中でも、「私は覆された都でこれより残酷なことを見ただろうか」(quid in euersa uidi crudelius urbe? 2.746)という妻クレウーサとの死別に際しては、彼女を捜して「悲しみのあまり、クレウーサの名を空しく何度も何度も繰り返し呼んだ」(maestusque Creusam/ nequiquam ingeminans iterumque iterumque uocaui. 2.768-69)とされる。そのアエネーアースの前にクレウーサの亡霊が現われ、英

雄の使命を告げて不安を取り去ったことから、アエネーアースは仲間のところへ戻り、故国を去ることになるが、彼の悲痛な様子を見てクレウーサは「どれほどの役に立つのです、狂おしい悲嘆に身を委ねることが」(quid tantum insano iuuat indulgere dolori? 2.776)とたしなめることから言葉を切り出した。彼女が去ったとき、アエネーアースは涙を流しながら(lacrimantem 2.790)、別れることが耐えられないように何度も亡霊を抱きとめようとした(2.792-94)

第6歌、冥界に降ったアエネーアースは勇士らの霊が集まる一面に全身を無残に切り刻まれたデーイポブスを見つける。彼のために英雄はみずから塚を立てて葬礼を施したものの、祖国に葬ることができなかったことを詫げる(6.505-08)。それに対してデーイポブスは、アエネーアースが死者のためにできるすべてを果たした(nihil o tibi, amice, relictum; omnia Deiphobo soluisti et funeris umbris. 6.509-10)と述べたのち、最期の夜の次第を語る。さらに続いたかもしれない二人の話は「夜は急ぎ足だ、アエネーアースよ、われらが泣くあいだも時は経つ」(nox ruit, Aenea; nos flendo ducimus horas. 6.539)というシビュラの言葉で遮られた。ここからアエネーアースがデーイポブスとの話のあいだずっと涙を流していたことが分かる。

第11歌、アエネーアースはトゥルヌスに討ち取られたパッラーズの遺骸を見たとき、

lacrimis ita fatur obortis  
'tene,' inquit 'miserande puer, cum laeta ueniret,  
inuidit Fortuna mihi, ne regna uideres  
nostra neque ad sedes uictor ueherere paternas ?  
non haec Euandro de te promissa parenti' (11.41-45)  
(アエネーアースは)涙をこぼしつつ、こう言った。

「そなただけは別なのか、憐れむべき少年よ。上機嫌で来ていた  
運の女神も恵むのを惜しむのか、そなたがわが王国を目にすることも  
父上の居城へ凱旋の騎馬を進めることも  
こんなことではない、そなたについての父王エウアンドロスとの約束は」。

というように、運の女神が勝利という贈り物を授けながら、エウアンドロスから預かったパッラーズというかけがえのない若者を奪い去った皮肉な仕打ちを慨嘆する。神格による不条理な振る舞いを非難する点は、ユートウルナがユピテルに純潔を奪われ、そのうえ、見返りに授かった不死によって永遠に悲しみ続けなければならないことを嘆くことと通じる面がある。そして、エウアンドロス王のもとへ運ばれるパッラーズの遺骸を見送ったとき、

substitutit Aeneas gemituque haec addit alto:  
 'nos alias hinc ad lacrimas eadem horrida belli  
 fata uocant': salue aeternum mihi maxime Palla,  
 aeternumque uale.' (11.95-98)

アエネーアースは足を止め、深く嘆息しつつ、さらにこう言った。  
 「我々はこれからもまだ涙を流す。それが恐るべき戦争の変わらぬ  
 運命の思し召しだ。永遠にさらばだ、偉大なるパッラースよ。  
 永遠の別れだ」。

ここで、繰り返される、字義どおりには「永遠に達者で」(salue aeternum 97, aeternum uale 98)という詩句は「私のために」(mihi 97)とあいまって、パッラースの生き生きとした記憶をアエネーアースが自分の心に永遠に留めようとしていることを表現しているようであり、ユートゥルナの悲嘆の永遠性と通じる面がある。

このように、ユートゥルナとアエネーアースのあいだには、死者への哀悼という点で重なり合う面がある。その一方、そこには、ユートゥルナの悲嘆がトゥルヌスただ一人に起因しているのに対し、アエネーアースのそれは彼の周囲のすべての人々に関わるという相違も認められる。

アエネーアースの悲嘆が多数の人々に向けられていることは上に引いた例からすでに明らかと思われるが、とくに注意すべきは、パッラースの遺骸を見送るときに「我々はこれからもまだ涙を流す。それが恐るべき戦争の変わらぬ運命の思し召しだ」(nos alias hinc ad lacrimas eadem horrida belli/ fata uocant 11.96-97)とアエネーアースが語る言葉である。戦争が続くかぎり、(ユノーの目論見どおり)犠牲者が絶えることはなく、その一人一人のために英雄は涙を流すことが示されている。

対して、先に見たユートゥルナがルトゥリー人を唆す言葉は彼女の悲嘆の性質を端的に示しているように思われる。彼女は「恥と思わぬか、ルトゥリー人よ、これほどの勇士ぞろいがただ一人の命を危険にさらすとは」(non pudet, o Rutuli, pro cunctis talibus unam/ obiectare animam? 12.229-30)と呼びかけた。数にまさるルトゥリー人全員で一人を守れ、という表向きの意味の裏で、そうして戦うことによってルトゥリー人のあいだに犠牲が出ることはまったくと言っていいほど顧慮されていない。ただ一人、誰よりも大切なトゥルヌスの命が救われるならば、その他大勢がどうなろうとかまわないかのようである。

ちなみに、「一人のために多数が犠牲」はドランケースがトゥルヌスに浴びせた非難のうちもっとも厳しいポイントであった<sup>24</sup>。第10歌に語られた戦いでの戦死者のために

<sup>24</sup> 二人の論戦全般については、Fanthamを参照。

葬儀を営み、ラティースの都が悲嘆に満ちたとき(11.203-14)、あとに残された子女がトゥルヌスの責任を問うと(12.215-19)、「ドランケースが、召されるのはただ一人、トゥルヌスただ一人が戦いの場へ求められている、と誓言する」(Drances solumque uocari/ testatur, solum posci in certamina Turnum 11.220-21)と語られる。ドランケースはさらに、王宮での審議の場で、「我々の目の前であれほど多数の輝かしい指揮官らが倒れ、全都が悲嘆に沈んだ」(lumina tot cecidisse ducum totamque uidemus/ consedissee urbem luctu 11.349-50)、「なぜ哀れな市民らを何度も危難の淵へおまえは投げ込むのか」(quid miseros totiens in aperta pericula ciuis/ proicis? 11.360-61)、「潰走の中に十分すぎる死者を我々は見た」(sat funera fusi/ uidimus 11.366-67)、と犠牲の大きさを訴え、それでもまだトゥルヌスが戦いを望むなら、「我ら二東三文の命、埋葬も涙ももらえぬその他大勢は戦場で倒されようではないか」(nos animae uiles, inhumata infleaque turba/ sternamur campis. 11.372-73)と当てつけた。それに対してトゥルヌスは、その場でもアエネアースとの一騎打ちに臨む覚悟を明言した(11.434-42)が、最終的に一騎打ちを決意する際にも「この右手でドランケースの言葉に反証しないのか」(dextra nec Drancis dicta refellam? 12.644)と自問する。

次に、もう一つのユートルナと共通点として挙げた、アエネアースにも命より榮譽を重んじる価値観に従わない行動をとる場合があることを見てみよう。

アエネアースは陥落する故国と運命をともしなかった。そのことから彼をトゥルヌスは「アジアの逃亡兵」(desertorem Asiae 12.14)と侮蔑した。また、落ち延びたトロイア人は「ダナイー人と無慈悲なアキッレースから生き残った者たち」(reliquias Danaum atque immitis Achilli 1.30, 3.87)と呼ばれる。また、アエネアース自身がデュードーの前で自分たちの苦難に憐れみを乞いながら、「ダナイー人から逃れて生き残った者たち」(reliquias Danaum 1.598)と名乗った。これらの表現には、おめおめと生き延びた恥辱の意識が滲んでいる。

しかし、故国脱出はアエネアースが望んだことではなかった。命と引き換えに誉れに浴する機会を逸した英雄の悔恨は作品冒頭から示されている。ユーノーが風神アエオルスに命じて吹かせた嵐により、海の藻屑と化そうとしたとき、

'o terque quaterque beati,  
quis ante ora patrum Troiae sub moenibus altis  
contigit oppetere! o Danaum fortissime gentis  
Tydide! mene Iliacis occumbere campis  
non potuisse tuaque animam hanc effundere dextra!" (1.94-98)

「おお、三重にも四重にも幸せな者たちよ、  
おめえたちは父親の目の前、トロイアの高き城市のもとで

死ぬ定めを得たのだから、ダナイー人の中で最大の勇士

テューデウスの子よ、なぜ私はトロイアの野で倒れ、

おまえの右手でこの息の根を立つことができなかったのか」。

とアエネアースは嘆いた。ここに窺われるように、故国と命運をともにすることができたなら、それは彼にとって本望であった。実際、第2歌、英雄は炎上するトロイアであくまで戦おうとしたことをみずから語っている。枕元に現われたヘクトールの亡霊から逃亡の忠告(1.289-95)を受けても、アエネアースはそれがまるで聞こえなかったかのように、館を出て火の手を目にするなり、「武器を執って死ぬことが誉れと考えた」(pulchrumque mori succurrit in armis 2.317)。このときのアエネアースは命より榮譽を重んじる伝統的な英雄そのものである。

しかし、それ以上にアエネアースの心は家族を大切に思う気持ちで揺れる。プリアムス王の最期を見たあと、彼を初めて恐怖が包み込んだ(me tum primum saeuus circumstetit horror 2.559)と語られるが、それは父、クレウーサ、イウールスが不幸に直面する姿が心に浮かんだからであった(2.560-63)。そこでたまたまヘレネーの姿を目にして、彼女を成敗すればそれなりの誉れが上がる(habet haec uictoria laudem/ extinxisse nefas tamen et sumpsisse merentis/ laudabor poenas 2.584-86)と、復讐のために猛り立ったとき、これを諫めるために現われた母神ウェヌスはまず、

'nate, quis indomitas tantus dolor excitat iras?

quid furis? aut quonam nostri tibi cura recessit?

non prius aspicias ubi fessum aetate parentem

liqueris Anchisen, superses coniunxne Creusa

Ascaniusque puer? ...'

(2.594-98)

「わが子よ、どのような大きな苦痛が憤怒を抑え難くかき立てるのか、

なぜ猛り狂うのか。私への思いやりはどこかへ消え去ったのか、

先に目を向けるところがあるではないか。老いに疲れたアンキーセースを

どこに置いてきたのだ。無事なのか、妻クレウーサは、

幼いアスカニウスは・・・」

と切り出した。アエネアースを諭すためにまず持ち出したのは彼の家族のことであり、それは効果を挙げたと考えられる。これに続いてウェヌスがトロイアを破壊している神々を示すと(2.604-31)、アエネアースはアンキーセースの館へ向かったからである。ところが、そこに着くと、アンキーセースが落ち延びることを頑なに拒んだ(2.634-54)ため、父を残しては行けない英雄は戦いへ戻ろうと考える。「私をダナイー人のもとへ戻してくれ。許せ、戻ってやり直したいのだ、戦いを。われらは今日全員死すとも、復讐

を果たす日は必ず来る」(reddite me Danais; sinite instraurata reuisam/ proelia. numquam omnes hodie moriemur inulti. 2.669-70)と叫び、武装して外に出ようとした彼を引き留めたのは彼の目の前に妻クレウーサが差し出したイウールス(paruumque patri tendebat Iulum 2.674)であった。「なによりも先にこの家を守れ」(hanc primum tutare domum 2.677)というクレウーサの訴えに続いて、イウールスの頭頂に異兆が生じ(2.679-84)、それにユピテルがアンキーセースの祈願に応える確証の兆しを与えた(2.686-98)ことから、老父の気持ちが変わった。アエネーアースは「それでは、さあ、愛する父上、私の首根につかまってください。私のこの肩で支えましょう。こんな苦役なら重くは感じません」(ergo age, care pater, ceruici imponere nostrae/ ipse subibo umeris nec me labor iste grauabit 2.707-08)と言って父を背負い、イウールスの手をとったあと、脱出のための集合地点を指示する。そして、アエネーアースが最後に故国で死ぬことを考えたのは、あとからついてきていると思った妻クレウーサの行方が分からなくなったときであった。彼は武具をまとい、敢然と引き返して命を危険にさらそうとする(ipse urbem repeto et cingor fulgentibus armis/ stat casus renouare omnis omnemque reuerti/ per Troiam et rursus caput obiectare periculis 2.749-51)。この必死の思いから彼を解放したのがクレウーサ自身の亡霊による促し(2.776-89)であったことは上に触れた。

以上、見てきたところからは、アエネーアースが故国を捨てることは、序歌にも示されるとおり、たしかに運命の定め(Troiae ab oris Italiam fato profugus 1.1-2)であるけれども、故国と命運をとものにすることに彼の本望があったこと、彼が命を捨てる覚悟を振り払うに際しては家族を大切に思う心が大きな働きを担ったことが窺える。つまり、彼がおめおめと生き延びることを選んだ動機は家族を救うことにあったように理解される。このような心情と動機は、トゥルヌスが命よりも榮譽を重んじると知りながら、なお彼を生き長らえさせようとするユートウルナと重なり合う面があるように思われる。

その一方、両者のあいだには、悲嘆の場合にも、一人を対象とするか多数に向けられるかという相違が見られたように、ここでも、それと似た違いが認められる。

ユートウルナがトゥルヌスの延命を画策するのは彼の命をなによりも大切にしているからであり、そのために彼女が彼を失う痛みを耐え難いと考えるからである。つまり、ユートウルナはトゥルヌスのためであると同時に自分のためにも延命工作を行なっていると見なしてよいと思われる。ところが、先に見たように、延命はトゥルヌス自身が望むところではなかった。とすると、結局、トゥルヌスの意志にそわなかった点でユートウルナの画策はすべて自分のためになされたとさえ見なしうるかもしれない。

対して、アエネーアースが生き延びたのは自分のためではない。上に見たように、彼が守るべき家族のためであった。家族を守ることは、とりわけイウールスがローマ建国の使命を引き継ぐ力をつけるまで見届けることを通じ、イウールスのあとも第6歌のい

いわゆる「英雄のカatalog」に登場する歴代の指導者たちへの布石としての意味を有する。その点で、アエネアースの命はこれらローマ建国の事業に連なる無数の人々を生かすためにあると言える。

## 5. ユートウルナの役割と機能

これまでの検討結果は次のようにまとめられよう。

ユピテルはユートウルナに対して、純潔を奪ったうえに、その見返りとして与えた不死性も彼女を悲しみで永遠に苛み続けるものであった点で、理不尽な暴君のようである。その一方、神々の王がユートウルナに不死性を与えたことがトゥルヌスに対する永遠の記憶を意図するものであれば、それはトゥルヌスへの誉れを意味するとも考えられる。

ユーノーとユートウルナはともにトゥルヌスを助けようとする。しかし、二人の目的と動機はまったく異なる。ユーノーが戦争の犠牲者を増やす「遅延」のために有用な駒としてトゥルヌスの延命工作をするのに対し、ユートウルナは兄の命をなによりも大切に思う心から行動する。

ユートウルナの思いに反して、トゥルヌスは命よりも栄誉を重んじる伝統的英雄の価値観に従って生をまっとうしようとする。そのようなトゥルヌスの本望をユートウルナもよく知ってはいるが、彼の価値観を共有することはできず、あくまで彼が生きていることを願う。この点で、ユートウルナはトゥルヌスの英雄としての誉れに関心がない。

アエネアースとユートウルナには、死者に示す深い悲しみと家族を大切に守ろうとする心情という二つの共通点がある。しかし、二点のいずれにおいても、ユートウルナがもっぱらトゥルヌス一人に関わるのに対し、アエネアースの場合には家族に留まらず、彼に連なる無数の人々とも関わることに相違が見られる。

以上の検討結果からまず明らかなことは、ユートウルナが存在が主要登場人物との関わりを通じて人間の命をめぐって異なる価値観を提起しながら、それぞれの登場人物の立場をより鮮明にすることに役立っているということであろう。

そのうえで、とくに重要であると思われるのは、一人の命をユートウルナが個人のものとしてのみ見ているのに対し、アエネアースがローマ建国に与る無数の人々との関係において見ているという対比である。というのも、このことは一方で、明らかに「ローマ建国」という作品の主題と関わっているからである。この点では、それは序歌において、字義どおりには、「ローマの民を建てる」(Romanam condere gentem 1.33)と表現されていたことにも注意すべきであろう。

こうした、個人的関心と同胞全体への配慮という対比はアエネアースとトゥルヌスの一騎打ちに集約的に表れているように思われる。上に見たように、ユートウルナは、一騎打ちを回避するために、トゥルヌス一人の命を危険にさらして恥ずかしくないのか、



と伝統的な英雄の価値観に訴えてルトゥリー人を唆したのに対し、トゥルヌスはまさにそうした英雄でありたいと望んで一騎打ちを求めた。この点で二人は異なる価値観を持っているが、ユートルナがトゥルヌス一人を救いたいと思う一方、トゥルヌスが身命を賭して戦うのが自分の榮譽のためであるという点では、いずれの行動もそれぞれの個人的動機から発している。

対して、アエネーアースの場合、一騎打ちを求める点はトゥルヌスと同じだが、それは自身の個人的榮譽のためではない。彼は誓約において次のように宣言する。

'cesserit Ausonio si fors uictoria Turno,  
conuenit Euandri uictos discedere ad urbem,  
cedet Iulus agris, nec post arma ulla rebelles  
Aeneadae referent ferroque haec regna lacescent.  
sin nostrum adnuerit nobis uictoria Martem  
(ut potius reor et potius di numine firment),  
non ego nec Teucris Italos parere iubebo  
nec mihi regna peto: paribus se legibus ambae  
inuictae gentes aeterna in foedera mittant.  
sacra deosque dabo; socer arma Latinus habeto,  
imperium sollemne socer; mihi moenia Teucri  
constituent ubique dabit Lauinia nomen.'

(12.183-94)

「もしアウソニア人トゥルヌスの手に勝利が渡ったならば、敗者はエウアンドルスの都へ退去するものと定める。イウルスもこの土地を出る。以後は、いかなる反逆の戦争もアエネーアースの子らは二度と仕掛けぬ。この王国を武力で挑発せぬ。しかし、勝利の女神が軍神をわれらの味方につけてくれたなら、——そのような私の期待を神威が確かなものとなしたまえ——私はイタリア人に対し、テウクリア人に従え、と命じはしない。王国を求めるのは私のためではないからだ。対等の条件で、双方の民が不敗のまま永久不変の盟約を結ぶこととしよう。祭儀と信仰も認めよう。わが舅ラティーンヌスには武力を保持させよう。舅として変わらぬ支配を揮うがよい。私にはテウクリア人らが城市を築いてくれよう。都の名はラーウィーニアにちなむだろう」。

英雄の言葉遣いは、一方で、トゥルヌスが自分を倒した場合については、Turno(183), Iulus(185), Aeneadae(186)と、当事者の名前を挙げつつ、トゥルヌスの勝利(uictoria

Turno 183), アエネーアース側の敗北(*uictos* 184)を自軍の完全撤退(*discedere* 184, *cedet* 185; *nec post arma ulla rebelles ... ferroue lacescent* 185-6)という形で明確に示す。他方、自分がトゥルヌスを倒した場合については、勝利が自分の力によるというより、神々の意志であるように述べつつ(*nostrum adnuerit nobis uictoria Martem* 187; *di numine firment* 188), 勝利から自分の権益を求めない(*nec mihi regna peto* 190)。トゥルヌスに対して収めた個人的な勝利が民族とは無関係であるかのように、戦いを交えたどちらの民にも敗北はなく(*ambae inuictae gentes* 190-91), 両者は対等(*nec Teucris Italos parere iubebo* 189; *paribus legibus aeterna in foedera* 190-91)とされる。舅となるラティヌスの武力と統治を尊重すること(*socer arma Latinus habeto, imperium sollemne socer* 192-93)は、舅と婿の関係で対立したユーリウス・カエサルとポンペイウス(*heu quantum inter se bellum ... ciebunt, aggeribus socer Alpinus, ... gener aduersis Eois!* 6.828-31)を対比的に想起させながら<sup>25</sup>、「婿と舅が連合するには、それだけの代償を臣下に負わせることとしよう」(*hac gener atque socer coeant mercede suorum* 7.317)というユーノーの目論見に対抗している。ここには、アエネーアースについて、戦いを交えた相手でも和約が成ったあとは同胞として尊重し、その配慮は自身の個人的栄誉に優先するという表現が見て取れるように思われる。トゥルヌスを倒すことも、これから同胞となる人々からこれ以上の犠牲を出さないことを第一の目的としていると考えられる。

さて、このようにアエネーアースが自身のことより、一度は敵として戦った相手も建国の同志として大切にすることで、全体への目配りを重んじる英雄であるとなると、このことは結末場面での英雄の行動とかみ合わない面のあることが気づかれる。トゥルヌスが

'uicisti et uictum tendere palmas  
Ausonii uidere; tua est Lauinia coniunx,  
ulterius ne tende odiis.'(12.936-38)

「おまえの勝ちだ。敗者の掌を差し伸べる私を  
アウソニア人らも見届けた。ラーウイーニアはおまえの妻だ。  
これ以上は怒りに走るな」。

<sup>25</sup> Cf. Tarrant, 139. 対立していた舅と婿のもとで戦った双方の民が融和することは、それら二つの民がもともと一つであるか、一つになる運命であることを暗示する。実際、カエサルとポンペイウスの霊に対しては、アンキーセースが戦争を戒め、カエサルにまず武装放棄を勧めた(6.832-35)一方、一騎打ちの誓約が覆されて再び激しい戦闘となったとき、詩人はこの衝突を嘆きながら、「これらの民はやがて永遠の平和を保つさためであるのに」(*aeterna gentis in pace futuras* 12.504)と訴えた。

と言って自分の敗北を認めたあと、躊躇ののちにアエネーアースはトゥルヌスに止めを刺す。パッラースの剣帯がトゥルヌスの肩に見えると、

furiis accensus et ira  
terribilis: 'tunc hinc spoliis indute meorum  
eripiare mihi ? Pallas te hoc uulnere, Pallas  
immolat et poenam scelerato ex sanguine sumit.' (12.946-49)

燃え上がった狂気と怒りは  
恐るべきものとなり、「わが仲間から奪った武具を身に着けたおまえを  
助けると思うのか。これはパッラースの一撃だ。パッラースがおまえを  
生贄とし、罪に汚れた血により報いを果たすのだ」。

と叫んだ。ここにはアエネーアースの個人的感情の爆発が見られる。「私」(meorum 947, mihi 948), 罪人としてのトゥルヌス(tu spoliis indute 947, te 948, scelerato ex sanguine 949), そして、罰を下すパッラース(Pallas, Pallas immolat et poenam sumit 948-49)が強調され、止めの一撃(hoc uulnere 948)はこれら三者の関係のみにもとづくように見える。戦争が終わったあとの敵味方の融和を第一に考える立場からは相手が敗北を認めた時点で、それまでの個人的な怒りや憎しみを捨てることがふさわしいと思われるのに、結末場面でアエネーアースはそれと正反対の行動を取っているのである。

この問題はこれまでピエタースに関わるジレンマとして捉えられてきた。一方で、アエネーアースがパッラースの仇討ちを果たすことは、主客の契りを結んだエウアンドロス王への義務をまっとうすることである。というのも、息子パッラースの命を奪われた老王はアエネーアースへの伝言として、

'quod uitam moror inuisam Pallante perempto  
dextra causa tua est, Turnum gnatoque patrique  
quam debere uides. meritis uacat hic tibi solus  
forutunaeque locus.' (11.177-80)

「パッラースが命を落としたいま、なぜ厭わしき生に留まるかといえば、  
あなたの右手ゆえだ。トゥルヌスに対し息子と父のため、  
果たすべき務めをご存知であろう。それだけが唯一、あなたの手柄にも  
武運にもまだ欠けている」。

と語っていたからである。しかし、他方、冥界に降ったアエネーアースに父アンキーセースの霊は

'tu regere imperio populus, Romane, memento  
(hae tibi erunt artes), pacique imponere morem,  
parcere subiectis et debellare superbos.' (6.851-53)

「ローマ人よ、そなたが覚えるべきは諸国民の統治だ。  
この技術こそ、そなたのもの、平和を人々のならわしとせしめ、  
従う者には寛容を示して、傲慢な者とは最後まで戦い抜くことだ」。

と語っていた。敗北を認めた相手の命を奪うことはこの忠告に反するように見える。

このジレンマに、ユートウルナとアエネーアースのあいだに観察された個人と同胞全体という対比はもう一つの視点を提供するように思われる。これまでは、ピエタースをめぐる、父とのあいだの血縁にしても、老王とのあいだの盟友関係にしても、いずれも英雄の直接的な個人的関係における行為の選択を問題としてきた。けれども、上に引いたエウアンドロスの伝言とアンキーセースの忠告のあいだにも個人と同胞全体という対比が見て取れる。エウアンドロスの伝言では、パッラースの無念を晴らし、エウアンドロスの悲嘆を慰めるためにアエネーアースの右手が必要とされる。右手は英雄の武勇とともに、盟友の信義<sup>26</sup>を目に見える形で象徴して、エウアンドロスとアエネーアースのあいだであればこそ存在する個別的な強い絆を印象づける。対して、アンキーセースはアエネーアースを目の前にしながら、まだこの世に存在しないローマ人に呼びかける。つまり、これからローマ建国の事業に関わるすべての人々に目が向けられている。「従う者に寛容を示す」(parcere subiectis 6.853)という言葉には戦後の融和が含意されている。

そこで、個人の立場を越えて、ローマが包摂する民全体への配慮を重んじるアエネーアースが結末場面では個人的感情を爆発させたように描かれるのはなぜか、という立問がここで可能であるかもしれない。この問いには、本稿の試みの範囲を越えるので立ち入らない<sup>27</sup>。それでも、ユートウルナが英雄との対比において提起する問題が作品の核心と深く関わっていることはこれまでの検討によって示されたことと思われる。そのうえで一つ補足すれば、同じようにピエタースにもとづいて行動するにしても、個人的関心にもとづく行為の選択より同胞全体に配慮した行動選択のほうがはるかに困難をとも

<sup>26</sup> 「右手」はアエネーアースとエウアンドロスが契りを交わす場面で繰り返し用いられる: 8.124, 164, 169, (274, 278, 302), 467。エウアンドロスはまた、かつて誉れをもたらした自分の武勇を「右手」(8.563, 567)という言葉で示す。老いてその力が失われたために、彼は自分の代わりにパッラースを出征させねばならなかった。

<sup>27</sup> 高橋の一連の論考は、結末場面のアエネーアースには知に限界のある人間ゆえの見損ないが含意されていることを論じようとした。「遅延」の策謀はユーノーとユートウルナによるものだが、その張本人がトゥルスヌスであるとアエネーアースは考え、トゥルスヌスの「助命嘆願」も遅延の意図に発していると見なして断罪した、と解釈された。

なうということである。

アエネーアースがエウアンドロスとの盟友関係をなによりも重んじ、個人的立場から行動する場合、トゥルヌスを倒してパッラースの仇討ちを果たす以外にない。他のどのようにしてもエウアンドロスとの信義に応えることはできないだろうからである。つまり、難しい判断に迫られることはない。ユートウルナにしても、トゥルヌスの命が大切という一途な思いが彼女の行為を決めている。自分の行為によって戦いが再開し、数多くの命が戦場に散るとしても、トゥルヌスを生き長らえさせるためには他に選択肢はない。それに対して、アンキーセースの忠告に従おうとする場合、まず、目の前の相手が「従う者」であるのか「傲慢な者」であるのか、見きわる必要がある。その判断を誤って、見かけは「従う者」だが、心の中は「傲慢な者」に寛容を示せば、のちに同胞がどれほどの災厄を蒙るか分らない。逆に、和を結べるはずの相手と戦い続けられれば、不必要な損失を大きくするだけでなく、根深い敵意を当事者双方の心に刻み、平和と統合を著しく困難にする。このことが、序歌に提示されるローマ建国の困難さとよく共鳴することは間違いないように思われる。

<テキスト、注釈、翻訳>

Conte, G. B., *P. Vergilius Maro Aeneis*. Berlin 2009.

Tarrant, R., *Virgil Aeneid Book XII*. Cambridge 2012.

Harrison, S. J., *Vergil Aeneid 10*. Oxford 1991.

岡道男・高橋宏幸（訳）『ウエルギリウス アエネーイス』京都大学学術出版会 2001.

松平千秋（訳）『ホメロス イーリアス』（上・下）岩波文庫 1992.

高橋宏幸（訳）『オウィディウス 祭暦』国文社 1994.

<参考文献>

大芝芳弘 『アエネーイス』のトゥルヌス像 『地中海学研究』 12 (1986), 49-76

小川正廣 『アエネーイス』における英雄と死 『西洋古典学研究』 43(1995), 75-86

高橋宏幸(2003), 「ウエルギリウス『アエネーイス』における「非情」」 『西洋古典学研究』 51, 94-106.

同 (2013) 『アエネーイス』における「葬礼」 『フィロロギカ』 8, 1-24.

Id. (2014), Reconsidering the Final Scene of the *Aeneid*. *JASCA* 2, 103-21.

Barchiesi, A. (1978), Il lamento di Giuturna. *MD* 1, 99-121.

Id. (1994), Rappresentazione del dolore e interpretazione nell' Eneide. *A & A* 40, 109-24.

Castellani, V., Anna and Juturna in the *Aneneid*. *Vergilius* 33 (1987), 49-57.

Fantham, E., Fighting Words: Turnus at Bay in the Latin Council (*Aeneid*

- 11.234-446). *AJP* 120 (1999), 259-80.
- Hardie, Ph., Closure in Latin Epic. In D. H. Roberts et al.(ed.), *Classical Closure: Reading the End in Greek and Latin Literature*. Princeton 1997, 139-62.
- Murgatroyd, P., Ovid, *Fasti* 2.585-616 and Vergil, *Aeneid* 12. *CQ* 53 (2003), 311-13.
- Oblink, D., Vergil, Philodemus, and the Lament of Iuturna. In M. Erler et al. (ed.), *Vertis in usum: Studies in Honor of Edward Courtney*. Leipzig 2002, 90-113.
- Perkell, Ch., The Lament of Iuturna: Pathos and Interpretation in the *Aeneid*. *TAPA* 127 (1997), 257-86.
- Pöschl, V., *Dichtkunst Virgils: Bild und Symbol in der Äneis*. Berlin/ New York 1977.
- Scullard, H. H., *Festivals and Ceremonies of the Roman Republic*. London 1981.
- West, G. S., Vergil's 'Helpful' Sisters: Anna and Iuturna in the *Aeneid*. *Vergilius* 25 (1979), 10-19.